ISSN 1344-9095

東北大学 東北アジア研究センター ニューズレター

The Newsletter CNEAS

第18号

目次

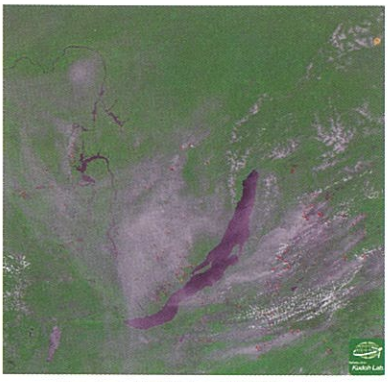
シベリア研究の一コマ……1
万華鏡：国際開発協力活動に関する幾つかの新しい動きについて……2
Area Report [SIGNAL]：「中国」・「ロシア」・「韓国」・「モンゴル」……3
日本館便り……4
研究所紹介：ロシア科学アカデミー・シベリア支部モンゴル学・仏教学・チベット学研究所……5
最近の共同研究会から……6
共同研究発表会の開催……6
平成15年度の新しい共同研究……6
最近のセンター出版物より……6
自己紹介……7
センター動向……7
活動風景……8

シベリア研究の一コマ

東北アジア研究センター教授 工藤 純一

センターに赴任してから早いもので3年目に入りました。この間、皆様の暖かいご理解とご支援によりシベリア研究に邁進できましたことを感謝申し上げます。

さて、小職は情報科学を専門として地球環境問題解決の糸口を探る研究を主に行っております。その主な対象地域はシベリアです。従来からの研究手段はフィールド調査研究が中心でしたが、本センターは1998年に日本の大学で最初にシベリアの中心都市ノボシビルスクのロシア科学アカデミーシベリア支部に連絡事務所（日本館）を設置し、日本で最初にロシア通信衛星を利用したコンピュータネットワークを構築しました。また、翌年からは同支部で受信した米国気象衛星ノアからのデータをリアルタイムで本センターへ伝送し研究に利用しています。このシステムを用いると仙台に居ながらシベリアの様子が観察できますので森林火災の検出等には大変有効です。このようなシベリア研究のインフラ整備は西澤潤一本学元総長（岩手県立大学長）ならびに徳田昌則本学名誉教授（大学評価・学位授与機構教授）の大きな牽引力によることは言うまでもありません。また、この研究体制が5年間以上も継続されているのに未だ他大学や研究機関の追随を許していません。



バイカル湖周辺の火災検出結果

シベリアを対象とした研究は日本よりも欧米の方が重要視しています。例えば、森林による二酸化炭素の吸収量を盛り込むことができる京都議定書の発行は、世界の3割の森林を保有するロシアにとって重要だからです。そのため、小職も欧米との共同研究を同時に進行しています。このような国際的な共同研究では、シベリアの環境情報をリアルタイムで入手できる本センターの役割が重要です。しかし、シベリア研究はとても奥が深いので、モスクワやウラジオストクにも研究拠点を設置し、文系と理系の研究者が一緒に行う必要性を強く感じています。特に、森林火災の研究では焼失面積の算出に大きな誤差が生じますのでその解決が最も重要ですが、それだけでは毎年多発する火災は減少しません。

広大なシベリアの環境はロシアだけでなく地球環境にとっても非常に重要です。日本にとって再隣国のロシアに対してシベリアの環境問題で貢献できるならば、これは、地球環境に貢献していることにも繋がります。1991年に米ソの冷戦は終結し旧ソ連が崩壊してロシアになりましたが、この時期からインターネットが普及し始めました。小職はこれが実質的に21世紀の始まりと考えております。日本人の中には旧ソ連のイメージでロシアを見ている人がまだ多くおりますが時代は大きく変わったのです。1999年8月にモスクワの日本大使館を訪問した際に、当時の渥美千尋公使が「日本でロシアと上手くやっているのは、みちのく銀行と東北大学くらいだ。」とおっしゃったことが印象的でした。これからもそうであるように努力する次第です。

萬華鏡

国際開発協力活動に関する幾つかの新しい動きについて

東北アジア研究センター教授　渡邊　之

1．はじめに

然る案件で民間企業との共同研究に多忙な日々を送っている。研究自体は順調に推移しており、そう遠くない時期に研究の大要が姿、形となって多くの人の目に触れることになる筈である。実証実験が始まる時期を待って公表したいと考えており、今少しご猶予をお願いしたい。そこで本稿では当研究部門のもう一つの課題である国際間の開発協力を進める上で有益な、関連する援助機関の最新の動きについて紹介する。

2．大学「組織」による国際協力への期待とそのための制度改革

去る6月9日と10日の両日、東京と京都の2ヶ所で世界銀行（WB）と文部科学省の共催による国際開発協力に関するセミナーが開催され、東京会場でのセミナーを聴講した。

WBは国連と連携し世界の貧困に苦しむ人口の半減を目指すなど、途上国支援に結びつく諸活動をこれまでもNGOやコミュニティ組織に依存して来た。セミナーでは　欧米先進諸国に於いて大学が政府機関や企業と連携、WBプログラムに沿ってビジネスとしてコンサルティング事業を受注し積極的に国際協力活動を展開している事例が報告された。この種の経験に乏しい日本の大学に向けてとして、“WBと大学の連携のあり方について”、“連携はどこで発生し得るか”、“日本・WB共同大学院奨学金制度”等について詳細な説明があり、WB東京事務所からも“コンサルタントビジネス機会・各種案件”や“大学との契約例”、“コンサルタントとしての活動希望者に対する登録制度”について紹介があった。

これに対し文部科学省「国際開発協力サポート・センター」プロジェクトについて起案者の政策研究大学院大学教授より、“独立行政法人化した後、法人格を持つ大学が組織として国際開発協力活動を推進出来るよう制度改革するもので、大学教官の国際協力が個人レベルでの奉仕活動に制約されていた非合理性からの脱却を狙いとする”との趣旨説明があった。後日手交された資料には、“同サポート・センターとして、国内大学「組織」による国際開発協力プロジェクトの受託促進を推進するために、大学やコンサル企業等の連携機関、援助機関に対して各種サポート活動を積極的に行う”と同時に、“それらサポート活動を通じて「国際開発協力サポート・センター」にノウハウ及び関連資料が蓄積されることを協力条件とする”としていて、自ら汗して共に学ぼうとする姿勢が強く感じられた。

3．国際開発協力に関する提案募集

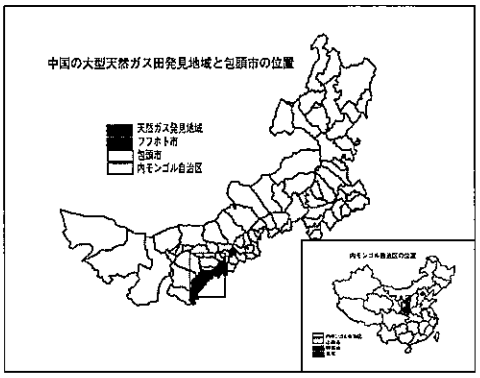
さらに6月20日には国際協力銀行（JBIC）で提案型・発掘型案件調査に係る説明会が実施された。国際開発協力に関し将来の融資案件に繋がる有効な知見情報の蓄積を図る提案型、および調査後比較的速やかに相手国政府の要請に基づきプロジェクトが始動する可能性のある発掘型のそれぞれについて広く提案を募るというのが趣旨であった。セミナー会場は、地方自治体及び外郭団体、企業、民間団体、NGO、大学等、全国各地から多数の参加者で溢れ、40分の説明に80分に亘って質疑応答が行われるなど熱気が充ちていた。

採択案件は昨年度実績で提案型6件、発掘型9件であったという。6月中に関心表明書を、7月末までにプレプロポーザルを提出すれば内部審査が行われ、プロポーザル提出・内容審査へと進み、採択されれば現地ミッション派遣、相手国政府との交渉、契約締結等提案者と共同で、あるいは銀行単独でも一連の作業を実施する予定との事であった。

募集するテーマは①貧困地域への対応の強化、②経済成長に向けた基盤整備、③環境改善・公害防止への支援、④地球環境問題への対応、⑤人材育成の支援、⑥開発途上国のIT化への支援、および⑦地方開発への支援というJBICのスキームに沿ったものに限定されるが、提案課題の多くはそれらの内のいずれかに該当する筈との事でとくに限定することを優先させたものではないとする補足説明が行われ、銀行側の低姿勢が強調された。

4．「国際開発協力サポート・センター」を訪問して

筆者の手許には現在、中国科学院のK教授より、“内モンゴル自治区で中国最大級の天然ガス田が発見され、その一部を利用して石炭をガス化し化工用原料ガスを製造することを目的として研究を実施中である、実験室的研究に引き続き、究極的には休止中の小規模高炉を改造してパイロットプラントテストを実施したい”として技術指導を要請する依頼が来ている。包頭市行政府との間で資金拠出や役割分担について契約が成立し、国家ハイテク技術発展計画にも採択された重要研究であるという。石炭のガス化については世界的に異なる2つの方式が技術的に既に確立されているが、実用化には膨大な投資を必要とする。K教授の提案には問題点も散見されるが、地域に見合う技術として成功すれば内陸部の西部大開発計画地域にあたるだけに、年々縮小傾向にある中国向けODA案件としても成立する余地が残されるのではないかと予見される。懸案は調査団派遣費の調達である。



そこで折角の機会でもあり上述の「国際開発協力サポート・センター」を訪れ相談したところ、要所を抑えた質問の後、この種の処理に詳しいシンクタンクを紹介され、出来るだけ早期にナショプロ研究、あるいはJBICプログラムに対し既に法人格を保有する同サポート・センターが連名で応募しようとの具体策が示された。大学内での体制構築についても質問があったが、事前に協力を依頼して快諾を得て入手していた工学部M教授の専門と外部公的活動履歴を示し了解を得ることが出来た。

5．おわりに

WBやJBICのプログラムへの参画は、研究をより深化させ、成果を実践する上で、あるいは実地研修を通じて学生教育を充実させ、有為の人材育成を図る上で東北アジア研究センターの活動を活性化させる効果を齎し得るのではないだろうか。「国際開発協力サポート・センター」プロジェクトへのアプローチと併せて検討されることをお勧めしたい。

AREA REPORT SIGNAL

中国から SARS流行下の中国メディア

4月下旬、中国当局が「非典（非典型性肺炎）」ことSARS蔓延の深刻な状況を公式に認め、首都北京を中心に社会の雰囲気は一変した。「非典」を押さえ込むべく、専門隔離病棟の建設など様々な措置が採られたが、そこで大きな役割を担ったのがテレビを中心としたマスメディアである。中国のメディアはかなり開放されてきているとはいえ、依然として党・政府の宣伝媒体としての役割を担っている。すでに3月頃から感染予防を呼びかける公共広告が流されていたが、4月下旬からはその種類も放送回数も一気に増大した。北京テレビの総合チャンネルでは特別な番組編成が採られ、北京及び全国の非典感染者数などの情報を逐次報道するほか、専門家による様々な分析や対処法などが連日放送された。面白いのは、これに伴いコマーシャルも消毒薬や除菌石鹸のような衛生関連商品の公告が大幅に増え、また隔離地区はもとより、人々の外出が減少したことを受けた即席麺のような保存食関連の公告や、外部との情報交換手段としてのインターネット関連公告なども散見されたことである。非典を契機に社会各層に入り込んで民衆の声を拾い検証を行う中国メディアの動静は胡錦濤新指導部の新たな政治姿勢とも一時目されたが、むしろ風評による社会の動揺を抑えると共に、WHOによる非典感染地域指定の早期解除に向けて官民一体の取り組みをアピールし、これを奇貨として北京五輪開催に向けた社会衛生面の改善向上を図ろうとする当局の意図が見え隠れする。そうしたこともあってか、非典が鎮静に向かい、メディアの報道態勢も正常化に向かうにつれ、公共公告等も非典と闘争する共産党を称え、また「病原菌拡散」を理由に路上で痰を吐く事を禁止するなど非典を教訓とした公共マナー向上を呼びかけるものへと変化してきている。

（上野稔弘）

ロシアから 「実用的」呪術のすすめ

最近ロシアの書店に入ると目につくのが、「呪術師」、「まじない治療師」などを自称する者の著書である。彼らは病気治療のための呪術的な「知識」を紙上で読者に伝授する。このような本を見ていると、だいたい次のような三段論法があることがわかる。①物価が上がって我々の生活は苦しくなりました→②だから病気になっても病院には行けないし、薬を買うお金もありません→③だから祖先から伝えられてきた呪文を唱えて病気を治しましょう。呪文ならタダです！　そして、呪術で病気が治ったという実例が語られ、呪術の有効性が「証明」される。病気治療法の他にも、「夫が飲まないようにする呪文」、「麻薬中毒を治す呪文」、「夫が妻を殴らないようにする呪文」、「隣人にかけられた呪いを祓う呪文」などの情報を満載した本が「実用書」として売られ、人気を博している。こういう現象は民間信仰を調査している筆者にとっては実に興味深いが、同時に苦しいロシアの社会状況が垣間見えて少し胸が痛くなる。「実用書」の著者によると、不幸の存在そのものが呪いの実在する証拠である。実際現在のロシアでは、呪われているとしか思えないほど苦しい生活をしている人が多数いるのであろう。

周知の通りソ連時代、この国では共産主義者たちによって無神論プロパガンダがさかんに行われた。宗教も迷信も撲滅の対象であった。上記のような「実用書」が出版できるようになったのは、ペレストロイカにより、1991年に出版の自由が保証されて以来のことである。ところが驚くべきことに「実用書」の著者には元共産党信奉者さえ見られる。彼らはソ連時代と180度逆転して、こう呼ぶ。「無神論を克服し、真の呪術信仰へ到達するのだ！」。彼らが体制崩壊に伴って直面したアイデンティティ・クライシスをどのように乗り越え、現在の信仰に至ったのか、興味は尽きない。

（藤原潤子）

『呪術と占いについての1000の教え』より。「多くの家庭が〈不和の呪い〉に苦しめられています。そういう時はフライパンに香を焚き、それを持って家の周り歩きながら唱えましょう。「夜が月と共にあり、星が星くずと共にあるように、私も家族と共にいられますように。…香よ、調和を与えたまえ、平和と宝を。アーメン」。

韓国から ‘大韓民国　変化の波’〈P世代の登場〉

最近、大韓民国はワールドカップ、蝋燭デモ、大統領選挙を通じて社会全体が新しい変化の波に覆われている。特にこのような過程で最も顕著に現れた特徴は‘若い世代の躍動的な動き’である。2003年、このような若い世代の意識を深層分析した調査報告書が発表された。第一企画から“大韓民国 変化の台風―若い彼ら”という名前で発表された調査報告書ではこれらを<P世代>と呼んでいる。<P世代>の年齢は普通17歳～39歳であり、ワールドカップと大統領選挙、蝋燭デモなどを経て現れた世代である。これらは社会全般にわたる積極的な参加の中で（Participation）、熱情（Passion）、力（Potential Power）を基盤とした社会パラダイムに変化を引き起こす世代（Paradigm-shifter）という特徴を持っている。

P世代は政治的民主化、情報化、経済的な豊かさを基盤として成長した若い世代で、P世代の80％が「私こそが社会を変えられる」という価値観を持っている。権威と固定観念を拒否しつつ新鮮さと変化を追及し、互いに情報を共有し団結する傾向が強いのが特徴である。正直な意志表現そして個性と多様性を尊重し、多様な経験と体験を好んでいる。これらの挑戦的な価値観と自発的に参加する精神はインターネットを通した意見の共有と直接的な表現で表されている。

（文：金鉉哲［大教センター専任講師］、
訳：平香織［国際文化研究科生］）

モンゴルから SARSのモンゴル名

SARSの感染は中国をはじめ多くの国に及んだが、モンゴル国では9人の患者を出した。いずれも中国から帰国した人々だったが、幸い死者はなく、この9人も全快している。ところでこの病気、日本では重症急性呼吸器症候群と訳されているが、いかにもわかりにくく、むしろ「サーズ」で通っているようである。モンゴル国では、これを「アミスガリン（呼吸の）・ツォチモグ（急な）・ハルタイ（危険な）・ハムシンジ（症候群）」と翻訳した。勿論Severe Acute Respiratory Syndromeの忠実な訳であるが、日本名と同様、なんとも判りにくく、ちまたではSARSで通っている。一方内モンゴルでは、中国語の「非典型性肺炎」を訳した「ニートレグ（典型）・ボス（非）・ウレヴセル（肺炎）」を使っているが、やはり一般にはSARSのようである。同じモンゴル語とはいえ、モンゴル国と内モンゴルではこういった専門用語にかなりの違いがある。それは、モンゴル国ではロシア語や英語から、内モンゴルでは漢語から、それぞれ翻訳されるからである。こういった学術用語の統一は、二つの国に分かれて住むモンゴルのような民族にはけっこう困難であるらしい。国境をまたぐ同じ民族が使う病名の民族語訳が分断されたまま、先に英語が通用してしまっている現実に、グローバル化が何を意味するのかをかいま見たような気がする。

（岡　洋樹）

SARSを報道するモンゴルの新聞記事

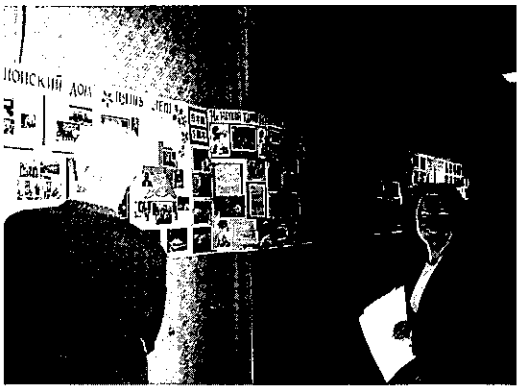
日本館便り
nihonkan-dayori

アカデムゴロドクで日本館の開所式が行われたのが5年前の5月28日。無機研ではこれを記念して、日本館の発起人でもいらっしゃる西澤潤一教授とF.A.クズネツォフ教授からいただいたメッセージなどで構成された壁新聞が張り出されました。今回は日本館便りとしてこれらをご紹介いたします。なお、西澤教授からいただいた文章は英語から露語に翻訳されたものから更に日本語訳したものとなりますがご了承ください。

（徳田由佳子）

ロシア科学アカデミー外国人会員、ロシア科学アカデミーシベリア支部無機化学研究所名誉博士、東北大学第17代目総長　西澤潤一教授

時の流れは速いものである。在ノボシビルスク東北大学東北アジア研究センター連絡事務所は5年前にその活動を始めた。20年以上前、F.A.クズネツォフ教授は我々に、東北大学の我が研究所とロシア科学アカデミーシベリア支部無機化学研究所の交流の著しい強化を促進することとなる門戸を開放した。それ以来、毎年のように私をノボシビルスクで開催される何かしら興味深い会議に招待した。遂にこれらの交流がもととなり東北大学東北アジア研究センター連絡事務所が開設されることとなった。我々の国は隣接しており両国民の血には共通性があるということは疑いのないことだが、我々の間には長期にわたり巨大で強固な鉄のカーテンが存在していた。そしてとうとうそのカーテンが崩壊したのだ。この5年間、決して早くはないが絶え間ない進歩が我々と共にあった。残念ながら達成された成果はあるべきほどではない。


無機研内に掲示された壁新聞

シベリア、それは人類の未来に不可欠な、膨大な資源の国である。それは高い知的ポテンシャルを備えた国でもある。資源と両国のポテンシャルの効率的な利用を可能にするため、我ら日本人はシベリアの民と密接に協力していかなければならない、すなわち同系民族のように振る舞わなければならないということを私は信じている。日本館がこの助けになることを私は期待してやまない。

無機化学研究所所長　アカデミー正会員F.A.クズネツォフ教授

70年代中旬、運命が私を、若いが既に物理·材料学で有名であった西澤潤一教授と引き合わせた。それ以降、我々は長期にわたって関係を保ってきた。西澤教授はアカデムゴロドクを頻繁に訪れ、無機化学研究所の研究員たちは仙台にある彼の研究所で働いた。我々を団結させていたのは学術だけでなく、人々の気質や人生への取り組み方に多くの共通点を持ち、地球儀の同じ領域に位置する両国には密接な関係が必要であるという共通の認識だった。我々は我々に可能な方法で関係を拡大させようと試みた。戦時中に発生した様々な矛盾の錯綜が長い間これを邪魔した。

90年代初旬、非常に望ましい状況が起こった。東北大学の総長であった西澤教授がコプチュグ（アカデミー正会員）と多岐にわたる協力関係に関する協定を締結したのだ。彼が総長の任期を終えた後、彼の夢は叶った。東北大学に新しい研究所、すなわち東北アジア研究センター（最初の構想はシベリアを中心とした）が創設されたのだ。一方、ノボシビルスクにはこの研究所の連絡事務所（日本館）が開設された。連絡事務所開設についての合意書にはN.L.ドブレツォフ（アカデミー正会員）が調印した。

決して大きくないこの組織がロシア科学アカデミーシベリア支部と東北大学およびその他、多岐方面の日本組織との関係を著しく拡大させた。

私はこれが始まりにすぎないということを信じたい。

研究所紹介

ロシア科学アカデミー・シベリア支部モンゴル学・仏教学・チベット学研究所

客員教授 Ts. P. ワンチコワ（岡　洋樹　訳）

ロシア科学アカデミー・シベリア支部モンゴル学・仏教学・チベット学研究所の歴史は1922年7月1日のブリヤート科学委員会（the Buryat Scientific Committee）の創設に遡る。それは、1923年に設置されたブリヤート・モンゴル・ソビエト社会主義自治共和国最初の学術機関であった。委員会の設置はバザル・バラディン（1878～1937）、ツィベーン・ジャムツァラノ（1881～1942）、ゴムボジャヴ・ツィビコフ（1873～1930）などの著名な人々の名に関わっている。1929年、これを基礎として、共和国の中心的学術研究機関であるブリヤート・モンゴル国立文化研究所が生み出された。以来その研究の発展と拡大に伴って、研究所は数回にわたり名称を変更した。すなわち、国立言語・文学・歴史研究所（GIYALI、1936年）、ブリヤート・モンゴル文化・経済研究所（BMNIIKE、1944年）、ブリヤート・モンゴル文化研究所（BMNIIK、1949年）である。

研究所の建物

研究所の発展の次の段階は、1958年、ソ連邦科学アカデミー・シベリア支部ブリヤート複合科学研究所（BKNII）が設置されたことによって始まった。その年、物理・化学・経済学・生物学などの部門が新たに開設された。1966年、BKNIIはソ連邦科学アカデミー・シベリア支部ブリヤート科学センターに改組され、ブリヤート社会科学研究所（BION, SO AN SSSR）とブリヤート自然科学研究所（BIEN, SO AN SSSR）に分かれた。この変更は、シベリアに現代的な科学・経済的基礎を生み出そうとするソ連政府の政策と結びついていた。この目的のために、既に1957年にソ連邦科学アカデミー・シベリア支部が設立されていた。そして1997年、ロシア科学アカデミー・シベリア支部ブリヤート社会科学研究所は、ロシア科学アカデミー・シベリア支部モンゴル学・仏教学・チベット学研究所（IMBT SO RAN）と名称を変更したのである。

この新しい研究所の名前は、今日の我が研究所の研究者達の基本的研究動向を示している。研究所のスタッフは、ブリヤート及び近隣の地域の歴史、中央アジアの諸民族の民族的・文化的起源及び民族史の研究、これらの地域に住む人々の社会的・経済的・政治的発展の規則や傾向の研究、ロシア・モンゴル・中国のモンゴル系住民のイデオロギー・社会思想・文化・言語及び芸術の比較史的研究、中央アジア諸民族の民族的・宗教的伝統（仏教・シャマニズム、伝統的信仰）の進歩と変容に関する研究、東及び中央アジア諸民族の伝統文化における仏教との接触及びその影響に関する研究を行っている。言語学者達は大規模な『ブリヤート語辞典』、『ロシア語・ブリヤート語辞典』、『ブリヤート語方言辞典』の編集を終えつつある。また彼等はブリヤート語文法の執筆も行っている。また研究者達は、ブリヤート民族の民族的・文化的復興の現代的プロセスや、共和国とロシア連邦指導部との関係に関わる問題、ブリヤート共和国の現代の社会構造に関する研究、ブリヤートの社会的及び政治的変化に関する研究などにとりくんでいる。

研究所は6部門・1分野及び情報マーケティング・グループから成る。研究部門は、中央アジア歴史文化部門（B.R.ゾリクトェフ教授）、歴史学・民族学・社会学部門（Yu.B.ランダロフ教授）、文献史料部門（Ts. P. ワンチコワ教授）、言語学部門（L.D.バドマエワ博士）、文学・民俗学部門（B.D. バイェルトェフ教授）、哲学・宗教学部門（S.Yu.レペホフ教授）及び文化芸術研究分野（T.D. スクリンニコワ教授）である。研究所長はロシア科学アカデミー準会員B.V.バザロフ教授である。

研究所のスタッフは約150名で、内90名が研究スタッフである。これには23名の教授（博士）と60名のPh.D学位保持者が含まれている。研究所では、大学院教育課程を通じて職員のトレーニングを行う長い伝統を有している。現在約50名の大学院生が在籍している。

研究所はロシアのみならず世界でも最大級のチベット文・モンゴル文版本・写本及び歴史文書のコレクションを有しているが、これらは研究所の東洋図書館とアーカイヴに保管され、文献史料部門が管理している。

研究所は、毎年様々なモノグラフやテーマ別の論文集を刊行している。一例を紹介すると、『ブリヤート歴史・文化アトラス』（2001年）、ノヴォシビルスクで刊行されているフォークロアの一大シリーズである『シベリア・ロシア極東フォークロア・モニュメント』のいくつかの巻、チベット・モンゴル専門文献の研究シリーズ及びそのロシア語訳などが挙げられる。また毎年様々な規模での学術会議が研究所によって開催されている。

研究所図書館

考古学者や民俗学・民族誌・言語学及び考古調査団によるフィールド調査が毎年実施されている。

研究所はブリヤートにおける全ての人文研究をコーディネートし、ブリヤートの他の大学とも緊密に協力している。研究所の研究者は、積極的に共和国の高等教育機関で教育や講演に関わり、いくつかの講座も持っている。また研究所は、モンゴル国・中国（内モンゴル）・日本・ドイツ・イギリス・ハンガリーなどの大学・研究機関及び研究者と緊密な関係を維持している。

●最近の共同研究会から

2003年5月9日、共同研究「北アジアの環境・文化・歴史に関する総合的研究」の第七回研究会が「宇宙からみたモンゴル：地域研究を目的とするリモートセンシングの応用」と題して開催された。今回の研究会は、モンゴル研究におけるリモートセンシング技術利用の可能性について、現在進行中の研究の具体的事例とその成果を文系を含めたメンバーで共有することを目的としている。当日の報告内容は以下の通り。

●**講演**：①田村正行（独立行政法人国立環境研究所教授・センター客員教授）「衛星画像による東アジアの環境変化の観測――内モンゴル草原での地上観測、高分解能画像と広域画像による解析」／②ボーナー・ウルフガング・マーティン（イリノイ州立大学シカゴ校教授・センター客員教授）「Utilization of Polarimetric SAR(Synthetic Aperture Radar) Interferometry for 3-DIM Forest Imaging.」

●**研究報告**：①佐藤源之「地域研究に利用できるリモートセンシング技術の概要」／②ダムディンスレン・アマルサイハン（モンゴル科学アカデミー研究員・センター客員研究員）「The role of high resolution satellite images for sustainable urbandevelopment in Mongolia.」／③風間聡（東北大学大学院環境科学研究科助教授）「東北地方の日積雪変化分布」／④工藤純一「モンゴル画像データベース」／⑤小池　崇文、佐藤源之「航空機SAR（合成開口レーダ）による森林植生分類」

（岡　洋樹）

●共同研究発表会の開催

去る4月7日、毎年恒例のセンター共同研究発表会が開催された。この発表会は、センターのスタッフが一堂に会して、センター内で進行中の共同研究の進行状況や成果の報告を行い、これを共有することを目的としている。本年度は、プロジェクトの概要報告だけでなく、プロジェクトに参加した研究者個々の具体的な研究報告も加えられ、会としての充実が図られた。各発表の題目は以下の通り。

●**報告Ⅰ《中間報告》**：①上野稔弘「図們江沿流居民生活誌の通時的共時的研究」／②成澤勝「現代韓国及び周辺同胞社会に見る伝統構造・社会動態と民族自我」／③山田勝芳「ノア・データの利用による東北アジアの環境変動解析とデータベース作成に関する学際的研究」／④菊地永佑「西シベリア塩性湖チャーニー湖沼群の環境と生物群集に関する研究」／⑤瀬川昌久「海南島の地方文化に関する文化人類学的研究」／⑥山田勝芳「東北アジア世界の形成と地域構造」／⑦磯部彰「東アジア出版文化の研究」／⑧平川新「前近代における日露交流資料の研究」／⑨谷口宏充「中国東北部白頭山の10世紀巨大噴火とその歴史的効果」／⑩岡洋樹「北アジアの環境・文化・歴史に関する総合的研究」　**《最終報告》**：①宮本和明「東北アジアにおける計量地域研究のための基盤整備」／②高倉浩樹「ポスト社会主義圏における民族・地域社会の構造変動に関する人類的研究」

●**報告Ⅱ**：①谷口宏充「火山爆発に伴う地表現象に対する新研究手法の開発と適用」／②岡洋樹「モンゴル国における歴史的基層社会構成に関する調査」／③柳田賢二「東北アジアにおける民族の跨境生態史の研究」／④鹿琪、佐藤源之「ウランバートル市における地下水計測」／⑤岡洋樹「科研費プロジェクト＜モンゴル草原の環境変動と遊牧生産の関係に関する研究＞について」／⑥成澤勝「古ツングース生産文化に関する自然科学的再検証」

（岡　洋樹）

●平成15年度の新しい共同研究

本センターでは、現在既に11件の共同研究が進められているが、今年度はあらたに1件が立ち上げられるほか、2件が期間延長となった。新しい共同研究は、「モンゴル語資料の文献学的研究」（平成15～17年）で、代表は栗林均教授。これは、モンゴル文字・パスパ文字・漢字・アラビア文字・トド文字・ソヨンボ文字・満州文字・キリル文字など、多種の文字で残されているモンゴル文史料の所在を調査するもので、テキストの電子化・和訳・注釈も視野に収めている。期間延長が認められたのは、「前近代における日露交流資料の研究」（平成16年度まで）で、代表は日本史の平川新教授。このプロジェクトは、日本側記録だけでなく、ロシア側研究者の協力を得て、現地資料の収集を意欲的に進めている。延長期間で史料集刊行を目指す。「東北アジアにおける計量地域研究のための基盤整備」（平成16年6月まで）は、宮本和明教授が代表。地域研究における地理情報や衛星画像の有用性は議論をまたないところであるが、本研究では、人文社会科学分野で応用可能なGISや衛星情報の変換に関わる方法論の開発を目指す。その他進行中の共同研究は以下の通り。

「中国東北部白頭山の10世紀巨大噴火とその歴史的効果」　（代表：谷口宏充教授）
「北アジアの環境・文化・歴史に関する総合的研究」　（代表：岡洋樹助教授）
「西シベリア塩性湖チャーニー湖沼群の環境と生物群集に関する研究」　（代表：菊地永祐教授）
「ノア・データの利用による東北アジアの環境変動解析とデータベース作成に関する学際的研究」　（代表：山田勝芳教授）
「図們江沿流域居民生活誌の通時的共時的研究」　（代表：上野稔弘助教授）
「現代韓国及び周辺同胞社会に見る伝統構造・社会動態と民族自我」　（代表：成澤勝教授）
「海南島の地方文化に関する文化人類学的研究」　（代表：瀬川昌久教授）
「東北アジア世界の形成と地域構造」　（代表：山田勝芳教授）
「東アジア出版文化の研究」　（代表：磯部彰教授）

（岡　洋樹）

最近のセンター出版物より

成澤勝編　『【鄭永振著】古ツングース諸族墳墓の比較研究』東北アジア研究叢書第11号　2003年

本書は、東北大学東北アジア研究センター共同研究プロジェクト「古ツングースの生産文化に関する自然科学的再検証」（研究代表者：成澤勝）の研究成果の一部である。鄭永振教授は同共同研究プロジェクトを進めるべく2002年に客員教授として本研究センターに招かれ、考古学の立場からそれまで研究を重ねてきた渤海および隣接時代の墳墓形態の方面の知見を以て大きく貢献した。本件共同研究プロジェクトにおける最も中核となるテーマは'ツングースとは何か、如何なる民族であったのか'そして'広汎に散居してきた同系諸族はどのように関わりを持っているのか'ということであった。北東ユーラシア中世の各時代にツングース系諸族は存在した。史書等によって名称および僅かの生活相が古くから確認されているものの、その輪郭は見えてこない。また、それぞれの系統関係についても実に漠然と語られてきているだけである。そうした状況下で、この時期のいわゆる古ツングースの文化的な一定の位相を解明し、さらに系統関係を説明しようとしたのが本書である。

（成澤　勝）

栗林均編　『「華夷訳語」（甲種本）モンゴル語全単語・語尾索引』東北アジア研究叢書第10号　2003年

1368年、モンゴル族の支配する元朝に代わって中原に明朝が建国されたが、漠北においてはモンゴル族の国家が依然として勢力を保っていた。明朝では漠北のモンゴル族と交渉し、また支配下に入ったモンゴル族と連絡を取るために、官吏がモンゴル語を学習する必要が生じた。『華夷訳語』は、このような状況の下で明朝の官吏がモンゴル語を学習するために編纂された語彙集と例文集である。語彙の部には、天文、地理、花木、鳥獣、等々17の部門に分類された844項目の単語が集められ、例文の部には中央から発せられた5件の詔勅と中央に寄せられた7件の上奏文が収められている。モンゴル語はすべて漢字で表記され、その傍らに漢語の逐語訳が付されているのが特徴である。

本書は、『華夷訳語』のテキスト影印と対照させて、モンゴル語のローマ字転写を掲げ、それをもとに全単語と語尾の索引を合わせて一書となしたものである。

（栗林　均）

磯部彰編　『東北大学所蔵豊後佐伯藩「以呂波分書目」の研究』東北アジア研究センター叢書第9号　2003年

東アジア文化を研究する上で、中国の宋代に始まる木版技術による印刷物は最も大切な資料であり、日本国内には各地に所蔵される。中でも、江戸幕府の文庫は、他に追随を許さず、今はやりの言葉で言えば、世界遺産と言える。その根幹をなすのは、実は徳川将軍家の蒐集した紅葉山文庫よりも、今の大分県の佐伯市に封を受けた小大名毛利氏の佐伯文庫本であった。江戸後期、幕府へ半数が献上されて、ほぼ保存され、我々の研究に稗益するところ多大である。しかし、国もとに残った半数の佐伯藩の蔵書は、明治になると多くが散佚し、献納後の佐伯文庫の状況を知る手懸りは乏しいものがあった。ところが、佐伯藩による幕府献書後、国もとに残った藩庫所蔵本の書目『以呂波分書目』が東北大学附属図書館の狩野文庫に収められ、しかも原本であることに気づいた。この書目を見れば、維新後散佚した佐伯藩の蔵書内容がわかるとともに、幕府が注目した佐伯文庫の性格なども想定し得る。

今回、本センターの共同研究であり、同時に文部科学省の特定領域研究である「東アジア出版文化の研究」の成果の一つとして、佐伯文庫の「以呂波分書目」の公表を東北アジア研究叢書の形で世に紹介できることとなった。稀少な文献もとかく公開の機会が少ない中で、資料の保存と普及を兼ねたこのたびの企画が少しでも社会貢献になればと考えている。

（磯部　彰）

●●●自己紹介●●●

●研究支援者　市原 美恵

本年4月1日より、東北アジア研究センターに加えて頂きました市原美恵と申します。当センターでは、地球化学研究分野の谷口宏充教授の下で、特定領域研究「火山爆発のダイナミックス」というプロジェクトに携わることになっております。専門は、火山物理学で、マグマの流れや爆発現象全般に興味を持っております。この分野を専攻したのは、野外に出て、体を動かす仕事がしたいからだったはずですが、どちらかといえば、室内で実験や計算をする方が本業になってしまっています。

必ずしも東北地域ではありませんが、アジアの国々には以前より興味をもっていまして、学生時代には、韓国、トルコ、インドネシアなどを旅行しました。アジア地域の民族料理（いわゆる、エスニック料理）がとても好きで、旅行先で覚えたものを我流で作ってみたりしていますが、なかなか実験の段階を超えられません。当センターに所属しているせっかくの機会に、もう少しアジア地域の歴史や文化についても勉強したいと思っております。

出身は徳島県ですが、大学入学以降のほとんどの時間を東京で過ごしました。仙台へは、平成13年4月に、東北大学流体科学研究所・衝撃波研究センターの研究員としてやって参りました。最初の年は、春から秋への変化の目まぐるしさに驚かされました。専ら自転車通勤をしておりますが、毎日の季節変化が肌に感じられ、楽しんでおります。

どうぞ、よろしくお願い致します。

●共同研究員　郡司 泰寛

昨年12月に東亜建設工業（株）より、渡邊之教授との共同研究の研究員として、ここ東北アジア研究センターに来ている郡司と申します。当社は港湾土木工事を得意とする会社で、私は機電部に所属していました。これまでは主に「浚渫」とりわけ「ポンプ浚渫船」を担当し、改造や保守、工事の計画、施工と国内の港湾を転々としてきました。現在、浚渫の多くは新たに港湾を造る為ではなく維持管理のためですが、仕事量は減っており、現在ではポンプ浚渫を担当したことのある若手は非常に少なくなっています。それでも数年間は、北海道での仕事があり、北海道出身の私は地元最高！と思っていましたが、仙台もなかなか住みやすいと思っています。仕事を離れて趣味はと言うと、広く浅く色々やっていますが、まずはオートバイ、学生時代には北海道内のツーリングや九州一周など国内旅行の足として利用していましたが、近年はオフロード、とりわけエンデューロと呼ばれるレースに年一回ですが北海道で参戦しています。レベルは素人なので完走が目標です。東北にもエンデューロレースが多くあるので、そのうち参加しようと企んでいます。スキューバダイビングは2年前オーストラリアでライセンスを取得し始めましたが、潜水回数が少ない割にはジンベイザメやマンタ等を見ることが出来て、かなりはまっています。東北アジア研究センターには来年の3月までの期間ですが、よろしくお願いいたします。

●講師（研究機関研究員）　馮 晅 Feng Xuan

私は、1973年の冬に貧しい知識人の家に生まれました。しかし、両親の姿とその教授によって、私はむしろよい家庭教育を受けることができたのです。

1992年、私は長春地質学院の応用地球物理学部に優秀な成績で入学しました。学部時代には勉学に専念したことで全学年でトップを維持することができ、優等学生の称号をいただきました。そして私の卒業論文は、優秀卒業論文として称賛を博しました。さらに自分を高めるために、計算機シュミレーションを副専攻に選び、計算機シュミレーション学部の卒業証書をいただきました。

1996年、私は優秀な総合成績により長春科学技術大学の地球探測・情報技術学院大学院への進学を勧められました。修士課程においては、勉学と科学研究に没頭しました。1999年、私は吉林大学地球探測・情報技術学院大学院博士課程に入学しました。在学中に、地震信号処理と非線形波に関する共著論文7本を刊行し、中国教育部より2001年中国高校科学技術進歩奨一等奨を授与されました。

2003年に私は優れた大学である東北大学の東北アジア研究センターに研究機関研究員として参りました。5月には、第108回物理探査学会（SEGJ）に参加し、佐藤源之研究室における地雷探査のためのアレイ・アンテナGPRに関する研究を紹介しました。これは有意義なプロジェクトです。センターでの活動は、私の能力を高めるものと思っております。

●講師（研究機関研究員）　渡邊 英幸

4月から東北アジア研究センター研究員に着任いたしました渡邊英幸です。去年までは東北大学国際文化研究科の大学院生として研究生活を送っておりました。専門は中国古代史で、とくに東アジア地域の華夷秩序を研究しております。

華夷秩序とは、「中華」すなわち中国地域の枠組みと、その内・外を結ぶ諸関係を総体として呼ぶ言葉です。前近代の東アジア地域には、中国の王朝国家が存在し、皇帝を頂点とする官僚制度や、公用語としての漢字文化、そして広大な経済圏によって、多種多様な人々を統合するシステムを構築していました。さらに王朝国家は、その境界外の地域との間で、様々な関係を取り結び、周辺の民族や国家をその秩序下に組み入れようとしていたと考えられます。このような「中華」を中心とする秩序体系に対して、多くの研究が蓄積されてきましたが、「中華」理念の歴史的な展開の過程は、まだ十分に解明されていません。

私の研究は、「中華」を構成する様々な差異や、「中華」の外側に位置する他者に着目しながら、個別具体的な関係の検討を通じて、各時代における華夷秩序のあり方を歴史的に追求してゆこうとするものです。現在は、とくに春秋戦国時代を中心に、秦漢時代の華夷秩序や「天下」領域の形成過程を追求しています。今後は東北アジア地域に関わる問題として研究を深めてゆきたいと考えております。皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

●●●センター動向

■寄附研究部門

【環境技術移転（NKK）寄附研究部門】

●渡邊　之（ワタナベ、イタル）教授：環境技術（平成13年1月着任）

●甦叶（スエー）助手：環境政策（平成13年4月着任）

■現在の客員研究者

本年7月～9月の東北アジア研究センターの客員研究者をご紹介します。

〈客員教授〉

【国内から】

●和田春樹（ワダ、ハルキ）教授：東京大学名誉教授・ロシア国立人文大学名誉博士、開発と社会変容の研究

●江夏由樹（エナツ、ヨシキ）教授：一橋大学大学院経済学研究科教授、東アジア・北アジア交流論

●田村正行（タムラ、マサユキ）教授：国立環境研究所上席研究官、ノアデータを利用したシベリアの環境解析

【海外から】

●VANCHIKOVA, Tsymjit Purbuevna（ワンチコワ、ツィムジト・プルブエヴナ）教授：ロシア、ロシア科学アカデミー・シベリア支部モンゴル学・チベット学・仏教学研究所文献部門主任、モンゴル仏典の文献学的研究

●金旭（キン・ギョク）教授：中国、吉林大学地球探索科学與技術学院教授、長白山火山の地球物理学的研究

〈客員研究員〉

●AMARSAIKHAN（アマルサイハン）研究員：モンゴル、モンゴル科学アカデミー上級研究員、合成開口レーダと地中レーダの組み合わせによるモンゴル環境計測

●MORRIS, John Francis（モリス、ジョン・フランシス）研究員：オーストラリア、宮城学院女子大学国際文化学科教授、近世東北史に関する研究

（岡　洋樹）

活動風景 CUPUM '03 Sendai 開催される

5月27日から3日間、仙台都心の定禅寺通りに面する「せんだいメディアテーク」において、第8回「都市計画および都市管理のためのコンピューター利用に関する国際会議」(CUPUM '03 Sendai) を東北アジア研究センターと仙台市の共催で開催した。

CUPUM (Computers in Urban Planning and Urban Management) は、地理情報システム (GIS) をはじめとする都市計画や都市運営上のコンピューター利用に関する国際学会である。関連分野は多岐に及び、都市計画、建築、工学、環境科学、行政、都市管理、その他の分野における最新のコンピューターシステムと利用に関して、広範囲に議論する国際フォーラムとして位置づけられる。1989年に香港で第1回会議が開催されて以来、隔年にオックスフォード (1991年)、アトランタ (1993年)、メルボルン (1995年)、ボンベイ (1997年)、ヴェニス (1999年) そしてホノルル (2001年) で開催されてきており、今回の仙台大会が第8回目にあたる。この分野の学会としては最初に設立されたものの一つであり、また最も活発な学会と国際的に高く認知されている

CUPUM'03 Sendaiは、イラク戦争に始まり、SARS問題の他、前日に規模が大きな地震に見舞われるという様々な困難もあったが、参加者は17の国と地域から総勢約130名におよび、盛会のうちに無事に終了した。

開会式では、大会委員長である私の開会挨拶の後、CUPUM理事長である米国Akron大学Richard E. Klosterman教授の他に、吉本高志本学総長と藤井黎仙台市長にご挨拶をいただいた。藤井市長におかれては、前日地震により東京泊を余儀なくされ、朝一番の新幹線で駆けつけていただいた。その後、岡部篤行東京大学教授の招待講義とMichael Wegener前Dortmund大学教授の特別講義の他、一般の論文発表はもちろん、2回のパーティーやその間での邦楽演奏、合気道実演、そして昼食時間を利用した茶会、さらには翌30日の山寺蔵王ツアーと、全て順調に進行した。その結果、学会本来の学術交流の成果はもちろん、参加者との和やかな交流が随所に生まれたといえる。連日の天気にも恵まれ、参加者は仙台そして東北大学に対してのいい印象を土産にしていただいたと自負している。

仙台の最も良い季節での開催を意図し、海外の大学日程等を考慮して5月末の開催を設定し、実際に期間中だけ好天に恵まれ初期の目的を達成したたわけであるが、SARS問題では最も対応が難しい時期に遭遇した。事前登録制をとっていたので、まず、SARS感染地域からの事前登録者に個別に相談することにより、全員自主的に参加を辞退してもらうこととした。次いで、SARSに対しての基本方針として、SARS感染地域からの参加はないこと、SARS感染地域等を経由しての参加は認めないこと等をはじめ、刻々変化する情報をe-mailとホームページを介して会議参加予定者に常に通知した。その結果、当初危惧したSARS感染の危険性を理由とした不参加者は、米国が出した渡航自粛勧告に日本が含まれると誤解した1名に止めることができたと思われる。また、関西で台湾医師によりもたらされたような風評被害の発生を阻止するため、地元メディアに対してもCUPUMにおけるSARS対策を通知し、報道していただいた。さらに当初は英文だけで構成していたホームページにも、急遽日本語でSARS対策の内容を掲載した。その他想定されるリスクに対しても十分な対策を講じた結果、参加者や地元の方にも安心していただいたと考えている。

ここに、あらためて関係各位のご協力に感謝し、会議の成功裏の終了をご報告する次第である。なお、会議の状況等に関してはホームページで公開しているので御一覧頂きたい。
(http://www.rs.civil.tohoku.ac.jp/~cupum03/)

(宮本和明)

編集後記

本号から、新年度の委員会が編集を引き継ぎました。宜しくお願いします。「日本館便り」では、日本館の生みの親西澤潤一先生とクズネツォフ先生のお言葉を掲載させていただきました。センターの活動への叱咤激励です。ロシア関連の活動の一層の深化を願ってやみません。本号の記事には、SARSの話題が目立ったように思います。現地調査がかかせない地域研究にとっては、人ごとではありません。 (岡 洋樹)

東北大学 東北アジア研究センター ニューズレター 第18号 2003年8月10日発行
発行 東北大学東北アジア研究センター 編集 東北アジア研究センター ニューズレター編集委員会
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 東北大学東北アジア研究センター
PHONE/FAX 022-217-6010
http://www.cneas.tohoku.ac.jp/